

中学3年生の時、日本YWCAが主催する「広島を考える旅」に参加した。同級生と寝台列車で広島に行つて、真面目なことを考えるのもいいかな、と実は気軽な気持ちだった。振り返ると、この旅が平和を意識し、広島という地が特別な意味を持つ契機となった。

被爆80年 リレー エッセー



JICA副理事長 宮崎 桂

思い正確に受け継ぐ責務

の状況、その後の混乱、そして周囲の人々の様子……。思い出すのも嫌であろう経験を、とつとつと語られるその姿は、今なお私の記憶に刻まれている。

なぜ、原爆を投下しなければいけなかったのか、また落とされたのか。軽い気持ちで参加したはずのこの経験が、私自身を30年以上

段に胸に迫ってくるのを感じた。私が中学生の時、広島でそうだったように、今の若い世代も当事者から証言を聞く体験が一番心に刺さるはずだ。だが被爆者は高齢化が年々進み、継承自体が難しくなっている。だとすれば、われわれにはその思いをできるだけ正確に、リアルに受け継ぎ、世界に伝える責務がある。

国際協力機構（JICA）は「人間の安全保障」の実践を目指している。平和を希求する国・地域の人々が恐怖と欠乏から逃れ、日々の生活を営めるよう、さらに何かを求めて他を侵略する行為をしなくて済むよう、人々の生計向上や関係者間の信頼醸成を通じた紛争予防に努めるのがミッションである。

広島を原点にこれからも世界に平和を訴え続けていく。それが私の若い頃からの誓いであり、唯一の被爆国、日本の開発協力機関JICAの使命である。80年を節目に改めてその胸に刻んでいる。

随時掲載します